TADOKU JUNIOR 自然のふしぎ神話 ★★★☆☆ ふつう 850語

The Secret of Fire

火のひみつ

Flora J. Cooke（1895年の本） 原文そのまま 朗読：Linette Geisel

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ 火のひみつを知っているのはマツの木だけ。ひみつを知りたいカシのどんぐりが、えだから転がり落ちて、ふしぎな旅をします。

A TREE STORY.

One summer night a great army of pine trees settled down in a quiet valley to rest. They were a tall, dark, grave-looking company.

They held their heads high in the air, for they were the only trees in the world who knew the wonderful secret of fire.

High above this valley, on the hillside, lived a little company of oaks.

They were young, brave, and strong-hearted.

When they saw the great band of pines marching into the valley, the tallest one said:

“Let us make them divide the gift of fire with us.”

“No,” said the oldest, wisest oak, “we must not risk, foolishly, the lives of our acorns. We could do nothing against so many.”

All the acorns had been listening to what the tree said. Each one longed to help in finding out the great secret.

One of them became so excited that he fell from the limb, down upon the hard ground. He did not stop at the foot of the tree, but rolled over and over, far down into the valley.

Here a brook picked him up and hurried him away; but as he stopped to rest by a stone, he heard his good friend, the wind, talking to a pine tree.

“What is the secret of fire which the pine trees know?” asked the wind. “Don’t you think it is selfish to keep it all to yourselves?”

The pine tree loved the wind and answered:

“Great wind, it is, indeed, a wonderful secret; you must never tell it.” Then she whispered it to the wind.

The little acorn went on and on down the stream.

He came to an old log, which was the home of a large family of squirrels. The mother squirrel was very sad. The last flood had brought her and her children far away from her old forest home. Her family had all been saved, but food was scarce and winter was near.

The acorn felt very sorry for her and said:

“I am too small to do you much good alone. If you will carry me back to my home, I will show you a forest with plenty of nuts. You can take your family there in the fall.”

This the squirrel was very glad to do.

As they went along the acorn called to all the elms, maples, willows and hickories to meet that night on the hilltop.

“Come to the hill across from the great blue mountains,” he said. “There you will learn the secret of fire.”

By evening they were all there, in great companies, ready for war on the pines.

When the squirrel came to the forest and saw all the nuts she was much pleased.

She offered to carry the acorn to the very top of the tallest tree. The trees were all glad of this, for every one wanted to hear what he said.

When the acorn began to speak, even the wind stopped whispering and listened.

“Friends,” he said, “there must be no battle. The pine trees have only the same gift of fire that you have. To every tree that stretches out its arms the glorious sun gives this gift. But it was in this way that the pine trees learned the secret of getting the fire from the wood: They saw an old Indian chief with two curious pieces of wood. One was round and smooth, the other was sharp-pointed. With all his strength he was rubbing them together. Soon he had worn a groove in the round stick. He rubbed faster and faster, and there in the groove was a tiny spark of fire. Then the Indian blew his breath upon the spark and a little yellow flame leaped up. All the pine trees saw it. ‘See, it is fire!’ they said.”

When the great company of trees had heard the acorn’s story they shook their heads in doubt. Then the acorn said:

“This is the true secret of fire. If you do not believe it why do you not try it for yourselves.”

They took this advice and all the trees learned that what he had said was true.

They were so happy that they spent the whole night in singing and dancing.

In the morning, when they saw the great blue mountains and the beautiful valley, many of them settled down upon the hillside for life.

The pines looked up and saw hundreds of trees with their shining arms. They were so frightened that they climbed high up on the mountain side. There they stayed a long, long time.



They grew sad and lonely, and often sighed and wished for their old home and comforts. But they were brave and strong-hearted, and helped each other.

At last, some of them came down into the valley again. Through suffering they had grown strong and unselfish. They gave their best trees to the people and their fairest to the children at Christmas time.

Indeed, there is not a tree in the world to-day more loved than the pine tree, who first had the secret of fire.



木のお話。

ある夏の夜、マツの木の大ぐんが、しずかな谷に来て休みました。せが高く、色がこく、まじめな顔つきのむれでした。

マツたちは頭を空高く上げていました。世界じゅうで火のふしぎなひみつを知っているのは、自分たちだけだったからです。

この谷のずっと上のおかのしゃめんには、カシの木の小さなむれがすんでいました。

カシたちはわかく、いさましく、強い心を持っていました。

マツの大ぐんが谷へ進んでくるのを見て、いちばんせの高いカシが言いました。

「あいつらに、火のおくりものをぼくたちにも分けさせよう。」

「いけない」と、いちばん年をとった、かしこいカシが言いました。「どんぐりたちの命を、ばかなことであぶない目にあわせてはいけない。あんなに大ぜいを相手に、わたしたちには何もできないよ。」

どんぐりたちはみんな、この木の言うことを聞いていました。どのどんぐりも、大きなひみつをさぐる手つだいがしたくてたまりませんでした。

そのうちの一つが、こうふんしすぎて、えだからかたい地面に落ちてしまいました。どんぐりは木の根もとで止まらず、ころころころころ転がって、ずっと下の谷まで行ってしまいました。

そこで小川がどんぐりをひろって、急いで運んでいきました。でも、石のそばで休んでいると、なかよしの風がマツの木と話しているのが聞こえました。

「マツの木が知っている火のひみつって、何なんだい？」と風はたずねました。「自分たちだけでひとりじめするなんて、自分かってだと思わないかい？」

マツの木は風が大すきだったので、こう答えました。

「大きな風さん、それは本当にふしぎなひみつなのよ。決してだれにも言ってはだめよ。」そしてマツは、風にそのひみつをささやきました。

小さなどんぐりは、小川をどんどん流れていきました。

どんぐりは古い丸太のところへ来ました。そこは、リスの大家族のすみかでした。お母さんリスは、とても悲しんでいました。このあいだの大水で、子どもたちといっしょに、もとの森の家からずっと遠くへ流されてしまったのです。家族はみんなぶじでしたが、食べ物は少なく、冬が近づいていました。

どんぐりはお母さんリスをとてもかわいそうに思って、言いました。

「ぼくは小さすぎて、ひとりではあまり役に立てません。でも、ぼくを家まで運んでくれたら、木の実がどっさりある森を教えてあげます。秋になったら、家族をそこへつれていけますよ。」

リスは大よろこびで、そうすることにしました。

とちゅうで、どんぐりは、ニレやカエデやヤナギやヒッコリーの木みんなに、今夜おかのてっぺんに集まるようによびかけました。

「大きな青い山の、むかいがわのおかに来てください」とどんぐりは言いました。「そこで、火のひみつを教えてあげます。」

夕方までに、木々はみんな大ぜいのむれになって集まり、マツとたたかうしたくをしていました。

リスは森に着いて、たくさんの木の実を見ると、とてもよろこびました。

そして、どんぐりを、いちばん高い木のてっぺんまで運んであげようと言いました。木々はみんな、それをよろこびました。だれもが、どんぐりの話を聞きたかったからです。

どんぐりが話しはじめると、風までささやくのをやめて、耳をすませました。

「みなさん」とどんぐりは言いました。「たたかってはいけません。マツの木が持っている火のおくりものは、みなさんが持っているのと同じものなのです。うでをのばすどの木にも、すばらしい太陽は、このおくりものをくれるのです。でも、マツの木が木から火をとり出すひみつを知ったのは、こういうわけでした。マツたちは、年とった先住みんの首長が、ふしぎな二本の木をもっているのを見たのです。一本は丸くてすべすべしていて、もう一本は先がとがっていました。首長は力いっぱい、その二本をこすり合わせていました。まもなく、丸い木にはみぞができました。首長がもっと速く、もっと速くこすると、そのみぞの中に、小さな火花がうまれました。それから首長が火花に息をふきかけると、小さな黄色いほのおがぱっともえ上がりました。マツの木たちはみんな、それを見ていました。『ほら、火だ！』とマツたちは言いました。」

どんぐりの話を聞いても、大ぜいの木々は、うたがって首をふりました。そこで、どんぐりは言いました。

「これが本当の火のひみつです。しんじないなら、自分でためしてみたらどうですか。」

木々はそのとおりにして、みんな、どんぐりの言ったことが本当だとわかりました。

木々はとてもうれしくて、ひとばんじゅう歌ったりおどったりしました。

朝になって、大きな青い山と美しい谷を見ると、たくさんの木がそのおかのしゃめんにずっとすむことにしました。

マツたちが見上げると、何百本もの木が、かがやくうでを広げていました。マツたちはとてもこわくなって、山のしゃめんの高い所へのぼっていきました。マツたちはそこに、長い長いあいだいました。

マツたちは悲しく、さびしくなり、よくため息をついては、むかしの家や楽なくらしをこいしがりました。けれども、マツたちはいさましく、強い心を持っていて、たがいに助け合いました。

やがて、マツの中には、また谷へおりてくるものもいました。苦しみをとおして、マツたちは強く、自分かってでなくなっていたのです。マツたちは、いちばんよい木を人々に、いちばん美しい木をクリスマスに子どもたちにさし出しました。

本当に、さいしょに火のひみつを知っていたマツの木ほどあいされている木は、今の世界にほかにないのです。

たんご と クイズ 火のひみつ

pine trees マツの木	**oaks** カシ（オーク）の木	**acorns** どんぐり
squirrels リス	**nuts** 木の実	**spark** 火花
flame ほのお	**mountain** 山	

Q1 火のひみつを知っていたのは、何の木？

① カシ　② ヤナギ　③ マツ

Q2 どんぐりはリスに、どんなお礼をやくそくした？

① 木の実がどっさりある森を教える　② 火のつけ方を教える　③ あたたかい家をあげる

Q3 先住みんの首長は、どうやって火をおこした？

① 石をたたいた　② 二本の木をこすり合わせた　③ 太陽の光を集めた

こたえ

Q1 ③ 世界じゅうで火のふしぎなひみつを知っているのは、マツの木だけでした。

Q2 ① 家まで運んでくれたら、木の実がどっさりある森を教えると言いました。冬が近いリスの家族には大助かりです。

Q3 ② 丸い木ととがった木を力いっぱいこすり合わせると、みぞに小さな火花がうまれました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #30800（Flora J. Cooke、1895年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1895 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Linette Geisel（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。